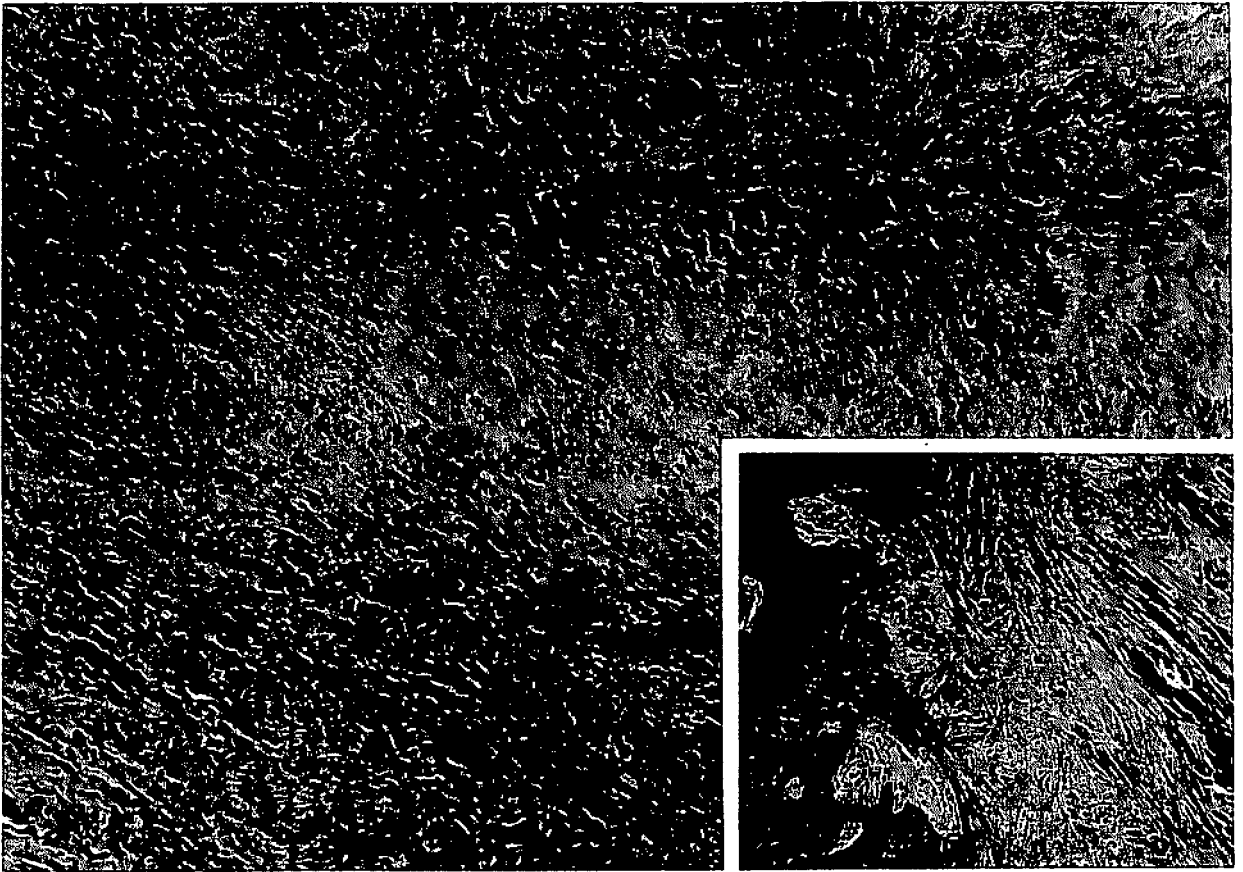


猫の膝窩部腫瘍

日本獣医畜産大学獣医病理学教室出題 第27回獣医病理学研修会提出標本No.478



動物：日本猫，雄，2才，体重2.45kg。

臨床事項：61年5月末，左後肢の腫脹がみられ，7月に開業獣医にて膝窩部の腫瘍が確認された。8月から本学家畜病院にて加療。この間，腫瘍は徐々に発育したが，元気，食欲もあり，跛行も認められなかった。数回の穿刺生検で悪性細胞は検出されなかった。X線検査では，左大腿骨骨幹端外側に長さ15mm程の骨吸収像が認められた。摘出手術が予定されたが，伝染性腹膜炎を併発したため行えず，予後不良と判断され，9月11日安楽死された。

肉眼所見：腫瘍は，著しく菲薄となった左大腿二頭筋の下にあり，10×8×3cm大，周囲筋組織とは比較的容易に分離され，白色光沢を有し，弾性硬の組織で，中心部は水腫状であった。腫瘍の一端は大腿骨足底窩付近に強く付着し，X線像と一致する骨の内部も腫瘍と同様の組織に置き換えられていた。

組織所見：腫瘍は，全体に密な膠原線維からなる細胞成分に乏しい組織で，腱に類似した構造を示した。大腿骨

に近接する部には，線維芽細胞様細胞および血管に富んだ部位が存在し，また巣状に線維性軟骨の形成が認められた。腫瘍付着部大腿骨の骨髄は，錯綜配列を示す線維性組織に置きかえられ，皮質骨の融解および骨膜の増生がみられた。

診断：鑑別診断として，hyperplastic scar tissue, fibrous histiocytoma, low-grade fibrosarcoma, fibromatosisなどが問題になると考えられた。全体に膠原線維の豊富な腱様組織であること，骨皮質および骨髄を侵していること，および良性の性質をもつと思われることから，骨膜から発生したデスマイド様線維腫と診断した。しかし，周囲の筋組織への浸潤が弱い点がヒトのデスマイド (periosteal desmoid)とは異なった。また軟骨形成が認められることから，chondro-myxomaという意見が出されたが，myxomaとみなしうる組織像は認められなかった。(写真) 提出標本，H E。腫瘍の代表的部分，および骨髄腔内の線維性組織 (挿入図)。